

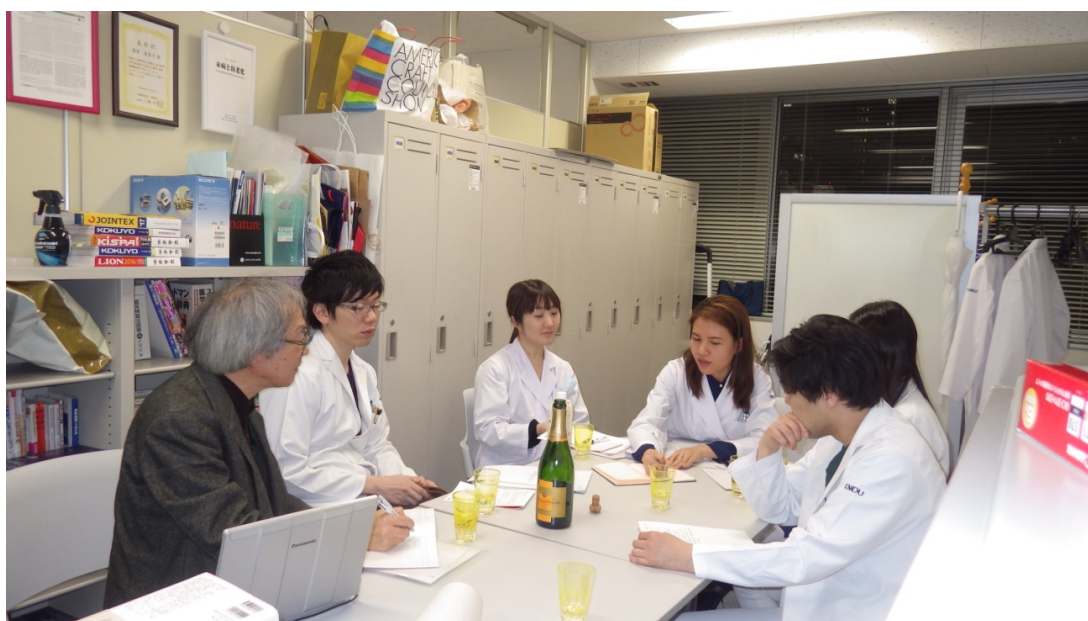
中村廣一先生勉強会（2017. 3. 6）

「歯科心身症記憶説」

－「今、ここ」との訣別－

昨年度の歯科心身医学会で教育講演を賜った、中村廣一先生（学 21 回生）をお招きして、医局内勉強会を開催致しました。

若い先生たちには、まず「今、ここ」の暗喩がピンと来ない様子でしたが、そのうち理解することでしょう。それでも先生が提唱された「歯科心身症は、過去の医療に伴う自覚症状の記憶である」とする理論モデルをクオリア概念も導入して病型横断的特徴や発症機序仮説など丁寧に解説して頂くことで、日常診療や今後の研究に新しい視点を与えて頂いたようです。相変わらず飄々と、しかし余計な言葉をばっさり削ぎ落としたお話で、論旨もより鋭利になっていました。

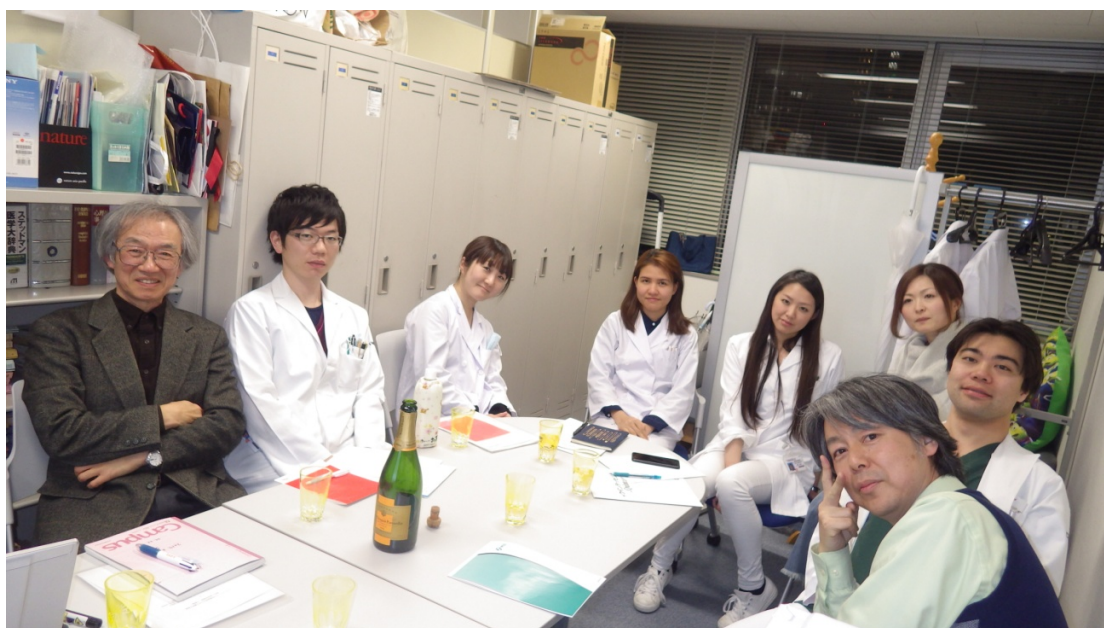


特に「正常な咬合感は存在しない」という命題は、今教室で一生懸命取り組んでいる Phantom bite の問題に非常に大きなヒントになりました。義歯の治療の後、ある程度のレベルが達成されていればほとんどの人に受容されます。うまく噛める時、人はその補綴物（義歯）に対して無意識です。すなわち「違和感がない」ことはあっても、「正しい咬合」の記憶（クオリア）は形成されない、ということです。

随分以前ですが、中村先生が精神・神経センターにおられることに伺ったお

話で「なるほど！」と膝を打ったことがあります。それは「義歯が馴染むのにある一定の期間を要するのは、使っているうちに微妙な擦り合わせが起こるからではなく、脳の中の感覚が書き換えられるのにそのくらいの時間がかかるから」といったお話でした。義歯調整は、咬み合う相手の歯に合わせる作業ではなく、患者さんの脳に義歯を合わせる作業だ、ということです。

この辺りの検証は我々現役世代の宿題ですが、もうすぐ発表できそうな脳機能が像研究の成果がお役に立ちそうです。そのデータを持ち寄って、また中村先生と議論を交わしたら、と思います。



(この後、夜遅くまで若者たちとの懇親会におつき合い頂きました。中村先生、本当にありがとうございました。また宜しくお願い致します)